
13. 丹波の我が村を都市と農村のふれあえる美しい地域に

美しいむらづくりの会
(兵庫県氷上郡柏原町)

I. 活動の背景と目的

40年前、“山”は生活の一部であり、なくてはならないものであった。栗山があり、雑木林がありそして杉、檜の植林があり。枝打ち、薪ひらい、竹の子掘り、松茸取り、栗ひらい、いくらでも仕事はあった。それが、いつの頃からか山へ行く人がいなくなった。理由は簡単である。石油という燃料が薪の替わりになり、松茸が出なくなり、材木の値打ちが下がったためである。もう一つ大きな理由は、山で生活してきた人の高齢化である。腰が曲がり、足が痛くなって山へ行けなくなってしまった。

そのころから、山は人の手が入らなくなり荒れ放題になった。山道は倒木でふさがれ、竹の子を掘らなくなったため竹林の面積が広がり、昔の面影が消えていった。

30年前、行政・観光協会の手で、小南山観光山道が完成した。山頂には、休憩所もできた。そのころの子供たちは、山に上がりソリを作って遊んだり、自分たちの基地を作ったりもした。もう既に、生活の一部ではなくなっていたが、辛うじて子供たちの遊び場としての機能を山は持っていた。

子供の減少と、テレビゲームの普及など、時代の流れと共に子供たちも山で遊ばなくなった。遠くまで見通しの利いた山頂も雑木が生い繁りほとんど何も見えなくなった。なおのこと山へ上がる人がいなくなり、山は自然のまま荒れていった。

ほんの40年ほど前まで、小南の生活を支えてきた小南山が、このまま荒れていくのを黙って見ていていいのだろうか。何とか人が上げれる山、そして上がりたくなる山にしようという考え方のもと、美しいむらづくり事業がスタートした。

II. 活動の内容

小南地区住民の意気込みは良く、こうしたらどうか、ああしたらどうかという風に、アイデアは次々出された。ただ、話をしている段階では良かったけれど、早い段階で問題が次々と出てきた。

まず、資金の問題。誰がやるのかという問題。完成した後の維持管理の問題。用地の問題。議論を重ねるのみで、前へ進まない日々が続いた。住民からは、「話をしていても、山は良くなる。行動を起こさなくてはだめだ。」という意見が出るようになり、平成9年11月、ケモノ道づくりに乗り出した。

このときは、ケモノ道のルートも決まっておらず、「ここからこっちに行こう」「こっちの方が上がりやすい」などと言いながら、枝打ちを



小南山での伐採作業

しながら道を切り開き、山頂まで上がった。山頂では、展望が全く利かない状態だったの

で、少しでも町並みが見えるようにしようと言うことになり、伐採を試みた。ノコギリとなたでは限界があり、展望が開けたのは、一部にとどまった。

平成10年4月、財団の補助も決定し、いよいよ本格的に始動すると言う時になって、山頂付近の土地の所有者（縁故使用地委員会）から、待ったがかかり動くに動けない状態になった。一度は許可をもらっていたが、財団補助の決定と共に計画変更をしたために、再度許可を取り直すように申し入れがあった。縁故使用地との協議が結局8月までかかり、本格始動は秋になってしまった。

”小南山の自然と親しむ会”と銘打ち、ケモノ道づくり、山頂付近の伐採を行ったのは、11月3日のことである。財団からも視察に来ていただき、補助で購入したチェーンソーをフル稼働させケモノ道はケモノ道らしく、山頂付近の展望は、町のシンボルで市街地中心にある八幡神社まで見渡せるようになった。

小南山再開発に主眼を置いて取り組んでいる美しいむらづくり事業であるが、一方で、小南山周辺道路も美しくしようと言うことで、フラワー道路を作っている。兵庫県の援助で、大型プランター100個を置き、夏はベゴニア、冬はパンジーを植え、道行く人の目を楽しませている。植え替えはもちろんのこと、土づくりから水やりまで、住民の手によって管理されているフラワー道路だ。

また、プランターだけでなく、道のりめんには、しだれ桜としだれ梅を交互に植栽し、その間には、ゆきやなぎが咲くように植え込みを行った。

小南山により多くの方が上がってほしいという思いから、平成11年3月、案内板の設置を行った。財団の補助で作成した看板を3カ所に立てた。小型バックホーを借りてきて、セメントを練って住民総出で設置した。



案内板設置作業



設置された案内板

また、今後の課題である、ケモノ道の階段工の完成と、展望台の建設の勉強のため、小南地区の行事として、京都の大河内山荘の視察を行った。

入山料を必要とする遊歩道は、危険のないよう完全に整備され、道の両側にはきれいな花が咲く小木が植えられ、京都市街を一望できるすばらしい眺めがあった。なかなかこの真似は出来ないにしても、憩える山とは何か、くつろげる場所はどんなところかを参加した住民はそれぞれに感じていたようだ。

Ⅲ. 活動の効果及び今後の課題

小南地区が、小南山の再開発に取り組み始めてから、周辺地区で山を見直す気運が高まっ

ている。森林ボランティアの協力を得て伐採をしたり、地区住民だけで山の整備に乗り出したり。山が、生活と離れていっても、人が生きていく上で山がなくてはならないと言うことが再び思い出されようとしている。

” 治山治水 ” 一山があつてこそ、田畑が潤い、田畑が潤つてこそ人が潤う。こんな簡単なことを、人は忘れようとしている。山が荒れて、山の機能を果たさなくなったとき、日本の国土は未曾有の災害という形で人に仕返しをするだろう。そうなる前に、小南山から発信した警告を周辺地区から全国に広げ、緑豊かな山里を形成して行かなくてはならない。

今後、小南地区として、展望台とか第2ケモノ道など計画はあるが、資金の問題と維持管理の問題でどこまで出来るかは定かではないが、小南山を、憩いくつろげる山に、そして、楽しめる山に変えていきたい。山が荒れるのを防ぐ唯一の方法は、人が山にはいることだ。

平成10年度、財団から助成をいただいたおかげで、小南山整備のいろいろな事業が出来、また、周辺地区にまでその波及効果があり、事業をやってきた値打ちがここにあったと感じる。尚、今後も地域の先駆者となれるよう小南山再開発に取り組んでいく。



登り口案内標